

## ドクターインタビュー

大阪赤十字病院 呼吸器内科副部長 吉村 千恵 先生

大阪赤十字病院（大阪市天王寺区）、呼吸器内科で副部長を務める吉村千恵先生。日々の診療はもちろん、基幹病院の大切な役割として、医療の地域連携のための活動にも取り組まれています。常に「患者さんの役に立ちたい」という想いで治療に臨む吉村先生に呼吸器のアレルギー疾患の治療法や、治療の現状についてお話を伺いました。

—— 最近の喘息治療において、先生のお考えや新しい治療法などお聞かせいただけますか？

喘息の治療に関しては、吸入ステロイド薬のように従来からの治療に加えて、コントロールがうまくいかない重症の場合は、新しい抗体製剤治療や気管支サーモプラスチック（BT治療）を行うこともあります。気管支サーモプラスチックは、内視鏡を使用して気管支を温め平滑筋の量を減らす治療です。気道の収縮能力を抑え、咳を起こすような神経が減るなど喘息コントロールに効果があります。

私がトピックスだと思うのは、喘息患者さんの副鼻腔炎です。喘息と併発することが多い好酸球性副鼻腔炎や、好中球性のように見えて好酸球が高い隠れ好酸球性副鼻腔炎の場合も、鼻と上気道、下気道の問題というのはかなり大きいと考えます。副鼻腔炎の治療を行うことは、喘息のコントロールに影響があると思います。また、上咽頭に免疫の問題があり、喘息を悪化させる可能性もあります。耳鼻科でBスポット療法という塩化亜鉛による上咽頭処置をすると、いろんな状況がよくなっていくこともあるので、喘息で治療がうまくいかない患者さんにはお勧めすることがあります。

また、症状によっては漢方薬を使用します。アトピー性皮膚炎も同じですが、自律神経を整えてコントロールしやすくするためなどに用いることもあります。コントロールという点においては、鍼灸治療も考えています。これからのエビデンスになっていけばいいと思いますね。

—— 喘息の治療の現状、また現場で感じることなどございますか？

喘息、COPD（慢性閉塞性肺疾患）の患者さんの救急受診が減少していると感じています。吸入薬を各自で使用する治療が進み、この吸入療法を正しく行うための指導が進んだことにより減少していると考えています。

吸入療法は、薬が気管支の炎症が起きている局所に直接作用し、迅速な効果が期待できる治療ですが、患者さんが薬を正しく使用できて初めて効果のある治療法です。うまく吸入できない患者さんには、わかりやすく吸入指導をすることが大切です。しかし、診察時のドクターや看護師の指導だけでは難しいこともあります。なので、MRの方に実物と同じように練習できるデモ装置を作るよう提案し、実際患者さんに服薬指導を行う薬局薬剤師、患者さんと接する時間の長い理学療法士の方々と連携を図るなど、患者さんの吸入薬を使用する手技のクオリティを担保できるよう努めました。その結果、医療にかかわる方々の協力があって、救急受診の減少につながっていると思っています。

—— 吸入療法を正しく行うための取り組みについて教えてください。

2004年に院外処方になるにあたり、患者さんに処方箋と一緒に薬局薬剤師の方への吸入指導依頼書を渡すようにしました。しかし、患者さんの吸入技術は上達されず症状が悪化し酷い状態になって入院するケースが増加して、「なぜなんだろう」と考えたとき本来の使用法と違うやり方で薬を吸入している患者さんが多いことに気づきました。

当時は近隣の薬局でどのように指導しているか把握できておらず、吸入指導が一向に統一されていませんでした。また、薬局薬剤師は患者さんがうまく吸入できていない場合や、治療の強化が必要だと思ってなかなか医師に伝えにくいという現状がありました。そこで、薬局が服薬に関する情報を処方医に伝える「服薬情報提供書」を双方向用に改善し、薬局薬剤師による吸入指導や、患者さんがうまく吸入できているかの確認、患者さんが医師に伝えられないような、残薬の状況、疑問や不安などを聞き出してもらい、病院側にフィードバックしてもらう仕組みを作りました。薬局との連携により、薬をうまく使用できる



吉村 千恵 先生 経歴

大阪赤十字病院 呼吸器内科副部長  
 関西医科大学卒業、大阪赤十字病院 内科部研修医  
 ・平成6年 大阪赤十字病院 内科部レジデント  
 ・平成7年 大阪赤十字病院 呼吸器科部レジデント  
 ・平成8年 関西医科大学 1内科 大学院  
 ・平成12年 大阪赤十字病院 呼吸器科部スタッフ  
 ・平成18年 大阪赤十字病院 がんサポートチームメンバー  
 ・平成22年 大阪赤十字病院 呼吸器科部 副部長。現在に至る。

平成26年よりNPO法人吸入療法のステップアップをめざす会 監事  
 平成28年より日本呼吸ケアリハビリテーション学会代議員

日本内科学会認定医 指導医/日本呼吸器学会専門医 指導医/  
 日本アレルギー学会専門医/呼吸ケア指導士（初級）  
 その他所属学会（日本緩和医療学会、日本感染症学会、日本結核病学会、日本肺癌学会、日本緩和医療学会、日本呼吸ケアリハビリテーション学会、日本呼吸器内視鏡学会）

患者さんが増え、症状が悪化して救急外来を受診する回数の減少につながりました。この仕組みがとても効果的だったので、口コミで全国に広まり現在では標準的に使用されています。また、この活動がきっかけで集まった先生方と「NPO法人 吸入療法のステップアップをめざす会」も結成されました。この会では定期的に講習会が開催され、看護師、薬剤師、理学療法士など医療者が参加し、吸入指導を実践し自信を持って指導できるよう勉強し各自がレベルアップしています。

当院の理学療法士は、テスターを使ってちゃんと患者さんが吸入できているかまで確認し、手が不自由な患者さんの場合は、作業療法士の方に相談して吸えるようにまでケアしてくれます。近隣の薬局薬剤師の方にもしっかり吸入指導を行ってもらうなど、まず私たちが皆でレベルアップしていくことが、患者さんのためになると考えています。基幹病院として頼ってもらえる存在になって、周囲の人たちにどれだけ貢献できるかを常に考えています。

—— 先生は日々の診療以外にも、医療者同士を繋ぐ活動もされておられます。問題を解決するための仕組みづくりで大変だったことなどございますか？

どの活動も、効率よく患者さんの役に立ちたいと思ったことがベースにあります。私の求めている医療は連携なくしてできません。院内の他職種の医療者、地域の開業医の先生方、MRの方など、医療に携わる方々との連携を行い、効率よくいい医療を提供する必要性を感じています。

何かを始めようとして、壁におちあたったとき、困ったとき、ずっと同じ方に向いていて進んでも無理なときがあります。そんなときは周囲を見渡してみると、助けてくれる人っているもんだなって思うんです。同じ想いの人たちとつながって、全国の仲間とつながれた。やはりあきらめずに続けることが大事だなと思います。

—— 先生の趣味や、楽しみなどございますか？

以前は、呼吸と関係が深いヨガをしていました。きっかけはやはり、治療につながればという思いからです。鍼灸や漢方なども自分でこれは使えるなと思ったものじゃないとってことで、勉強することも結構楽しいですね。家族と過ごす時間も大切にしています。子どもがいるから頑張れることもありますし、仕事と家庭との気持ちの切り替えが大事だと思います。

—— 本日は貴重なお話、ありがとうございました。

（文責 三原 ナミ）